

英語プロジェクト科目「TOEIC対策」と オンライン会話学習の導入について

菊地利奈 Rina Kikuchi
滋賀大学 経済学部 / 教授

2019年度秋学期に、経済学部の学生を対象とした「TOEIC対策」として、週2日(3時間) 英語授業時間を確保した「プロジェクト科目」を実験的に運営した。本エッセイは、この2つのクラス(31名)についてまとめたものである。

参考までに述べると、2019年5月に実施したTOEIC-IPの経済学部一回生の受験者は396名で、平均スコアは478点であった(図1参照)。本学部の英語教員として私は、このスコアを他大学の平均と比較することよりも、このデータに表れているひとりひとりの学生の「英語力」を伸ばし、彼らが英語を使うことで世界各国の情報を得、広い視野を持ち、多面的に考えながら自分の意見を培っていく力をつけることが大切だと思っている。そこで、読む・聞くだけの力をつけてスコアを伸ばすことだけでなく、英語を使うことで広がる世界を学生に体感してもらうために、リスニングとリーディングのみならず、スピーキングを導入した「プロジェクト科目」を2クラスたちあげた。

日本の多くの大学で外国語習熟度が低い大きな理由は、学習時間が非常に限られていることにある。たとえば、日本語教育で世界的に定評のあるオーストラリア国立大学では、学生は毎日1つ以上の日本語の授業を受講する。授業には、文法、読む、書く、聞く、話すなど言語学習だけではなく、その言語が使用されるコンテキストを学ぶための日本の文学、文化、歴史も含まれる。言語は、その言語が使用されるコンテキスト(社会や文化)を学ばなければ身につけることができないからである。それに対して、本学部では、1回生の英語授業は、週に3時間(2コマ)のみである。英語圏文化や文学、歴史について学ぶチャンスも少な

い。また、1クラスの人数は40人前後と多い。このような英語学習環境を少しでも理想的な環境に近づけるため、本プロジェクト科目では、①1クラス15名、②授業は週に2回(月曜に文法とリーディング、木曜にリスニングとスピーキングで合計3時間)、③宿題として、Eラーニングで毎日リスニングとリーディングの練習をする、④アウトプット(スピーキング)時間を確保することで学生の学習意欲を維持する、⑤授業の単位化をおこなった。

ここでは特に本プロジェクトの特徴ともいえる④について説明したい。本プロジェクト科目では、「読む・聞く」というインプット学習を通して身につけた英語力を使った「アウトプット」を重視し、オンライン英会話(スピーキング)を取り入れた。今回は、学生とセブ島にいる英語教師が1対1で25分間、毎レッスン、テーマを決めて会話をする方式を採用した。一般的に就職活動で使用するTOEICのスコアは、リスニングとリーディングの二部構成(990点満点)であり、スコアを伸ばすことだけを考えればリスニングとリーディングのみ集中的に学べばよいことになる。それにもかかわらず、会話というスピーキング重視にみえるアクティビティを取り入れたことには、大きな理由がある。

語学習得においてもっとも効果的な学習法は「毎日続けること」である。「毎日15分」学習すれば若い学生たちの英語能力は著しく伸びるのであるが、この「毎日15分」が続かない。続かない理由のひとつは、英語が学生にとって日常生活に必要なない言語であり、また、将来必要になることが実感しにくいいため、なぜ英語を学ぶ必要があるのか、その理由がつかみにくいことがある。使う機会がほとんどない学生が多い

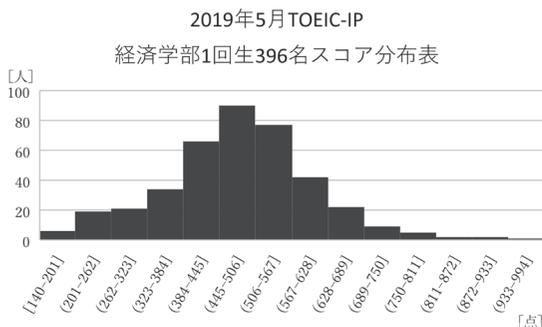


図1

以上、学習意欲を維持することが非常に難しい。「筋トレを毎日頑張りレギュラーになって甲子園にでたい」というような夢や目標がなければ、球拾いにあけられる毎日を耐え忍ぶことはそうそうできるものではない。週に一度のオンライン会話レッスン導入の狙いは、たとえば、つらいトレーニングを重ねる学生への「練習試合」。1対1であるから、学生は25分間、なんとしても英語を話さなければならない環境におかれる。この25分間で、学生が他文化圏の人との(英)会話を楽しんだり、英語が通じることに喜びを覚えたり、言いたいことが言葉にならず悔しい思いをしったりすることで、「もっと英語を頑張りたい」と思ってもらうための起爆剤としての採用であった。

これは、日本語がまったくできない相手と、1対1で会話をした体験がほとんどない本学部の学生たちにとって、非常に有効な時間となった。例年「やる気がある」学生を集め、TOEIC対策を練ってきたが、これまでもっとも大きな障害となっていた、学習意欲の維持が本プロジェクトで克服できたことは、学生の出席率の高さ(88%)、毎週の宿題の進捗率、スコアの伸び(平均602.7点から679.8点)などからも明らかである(図2参照)¹⁾。インプット(読む、聞く、語彙を増やすなどの練習)だけでは学習が単調になってしまいがちで克服が難しかった、「学生の学習意欲が続かない」という障害を、オンライン会話学習導入により力をつければつけるほど楽しくなる英会話の喜びで克服できたことの意義は大きい。

1) 600点を超えるとスコアの伸びはゆるやかになるため、約12週の授業でこれだけスコアが伸びたことは学生の努力の賜物であり、快挙である。

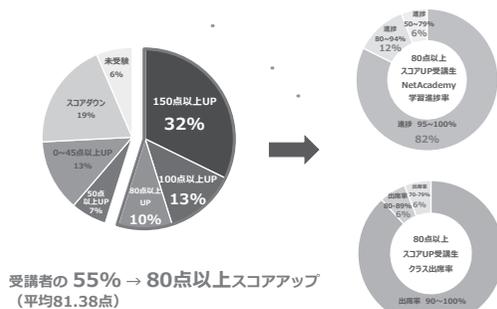


図2

英会話学習の導入は、英語がコミュニケーションのツールであること、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」学ぶことの大切さを実感できる、学生にとって貴重な体験にもなったと思う。英語は、TOEICのスコアを伸ばすために学ぶものではない。TOEICのスコアが伸びることが目標になってしまった学生の場合、たとえば、「800点を超えたから」と学習をやめてしまう学生がでる。しかしTOEICが800点程度では、たいした会話もできないのが現実だ。なぜなら、TOEICが800点ということは、ビジネスシーンで日常にかわされる会話の2割が常に理解できていないということだからだ。日本語の商談に置き換えればよりわかりやすいと思うが、取引相手が会話の内容の2割をわかっていない状態で成り立つ商談などないであろう。TOEIC800点というのは、「800点もあるから英語が得意」なのではなく、会話の2割が常に聞き取れていない状態であるということなのである。数値だけを見ていればわからないが、会話レッスンがあれば「会話の2割が聞き取れない」ということがどういうことであるのか実感できる。

言語能力は数値でははかれない。言語はあくまでツールである。英語というツールを使って、自分になにができるか、なにがしたいのか、学生ひとりひとりに体感してもらいながら英語を身につけ、世界に羽ばたく人材に育てほしい、そう願っている。